

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報 告 書

プログラム名	地域に根ざした教育課程編成研修カリキュラム開発
プログラムの特徴	<p>学習指導要領ではカリキュラムの編成や学習指導等に当たっては、児童生徒の実態と地域の実態に即して実践を展開することが求められていると同時に、すぐれた授業実践では「地域の教材化」がキーワードとして挙げられることが多い。</p> <p>しかし、実際には地域の実態を生かし、地域に根ざした授業展開は難しいとされ敬遠されがちである。</p> <p>そこで、本プログラムでは、教育センターでの希望研修講座として、「地域の実態把握」「地域素材の教材化」「地域に根ざした授業実践と授業技術」にかかわる内容を、「教育の方法やスキルの習得」「問題解決能力の向上」「発想力・想像力の向上」「行動や態度の変容の自覚」といった観点で配列して開講し、受講者の地域に根ざした授業改善力の向上を図ることを第一目標とした。</p> <p>そして、センターの研修で地域に根ざした授業改善に関わる知識・技能を得た受講者が、自校に戻りそのノウハウを同僚性を活用してOJT的に日々の授業実践に研修として組み込み、地域の素材の教材化と授業実践化に向けて成果を広く公開するというPDCAサイクルに基づいた自己研修の流れを創造することを第二目標とした。</p>

平成22年3月

機関名 信州大学 連携先 長野県教育委員会

プログラムの全体概要

[受講者]

 公開研究授業
 等が予定されている
 課題意識のある
 教員

教育センター希望研修講座
「実践研究」
 地域素材の教材化を中心に、受講者自身の課題意識を尊重しながら、受講者の所属校の授業改善についてOJT型研修の可能性を1年間かけて探ることを目的とする講座を開設。

教育センター専門
 主事
支援
 大学の教育方法等
 担当教員

集合研修

自校の地域素材の活用度チェック(演習)



OJT型の授業改善のあり方について(講義)



自己の意思決定のあり方を振り返る(演習)

教職員が地域を知る
 OJT型の研修方法について
 ※研修用デジタルコンテンツの活用法



実践し、広げる

校内研修



日常業務の中で、教員が顔を合わせる場を活用して、授業を振り返る機会を作り出す。



同僚や地域の方が講師となって地域を知る研修の展開



集合研修

公開研究授業などで、地域素材の活用法やOJT型の研修方法等発表することで、他校の先生方にも広める。



[教育センターでの研修]

受講者の学校における実践等の情報交換を2ヶ月ごとに集合研修で実施し、充実を図る。

I 開発の目的・方法・組織

1. 開発目的

「義務教育に関する意識調査」（平成 17 年）で、総合的な時間における教師の力量や熱意の差による指導のばらつきが課題として指摘されている。

この課題は総合的な学習にとどまらず、すべての教育活動に共通の事項であるといえ、教師自らが地域の素材を教材化し授業実践にまで引き上げる力量の低下が、その一因であると考えられる。

特に、新学習指導要領では、地域社会の実態を教師が十分に分析・検討し、的確に把握することで地域が持つ自然や文化、さらには教育資源や学習環境を活用することが求められている。

そこで、本カリキュラムは、まず「地域の実態把握」「地域素材の教材化」「地域に根ざした授業実践と授業技術」にかかわる研修内容を、「教育の方法やスキルの習得」「問題解決能力の向上」「発想力・想像力の向上」「行動や態度の変容の自覚」といった観点で配列し、連携する長野県総合教育センターや長野市教育センターでの教科・領域教育の研修に組み込むことで、受講者の授業にかかわる力量の向上を図りたいと考えた。

また、一般的に集合研修は、知識理念概念等を理解し、方法やスキルを習得することに力点が置かれてしまうことが多いため、受講者が教室に戻った際に同僚性を発揮すべく、校内研修の中核として、地域の素材の教材化と授業実践化に向けての教育実践を組み込み、その成果を広く公開するというPDCAサイクルに基づいた研修の流れを取り入れ、受講者のみならず、受講者の所属する学校の教員の行動や態度等を変容させることと、それに伴う問題解決能力を培い、授業や生徒指導にかかわる発想力や想像力を培うことをもうひとつの目的とした。

結果として、本カリキュラム受講者ならびに受講者が所属する学校における教員の同僚性の機能UPも視野に入れた校内での研修力の向上が期待でき、「地域を知り授業実践に生かすことによる教員の力量UP」研修カリキュラムとして機能するものと考えた。

2. 開発の方法

長野県総合教育センターの希望研修講座として開講している受講教員の課題意識に即した形で1年間研修を進めていく「実践研究」と連携し、受講者が集合研修で習得した内容を校内研修で、どのように展開したのかを検証することを通して、カリキュラムと教材の開発を行った。また、長野市教育センターにおいても、授業改善に関わる講座受講者に前述同等の内容で検証を試みた。

具体的には、地域を教材化しすぐれた授業実践を行っている教員の、地域の教材化の手法と開発した教材を基にした授業実践を典型例として示し、そのノウハウ

ウを研修を受けた教員が自校で校内研修の核教員となり、実際に地域調査等地域を知る研修を展開することをめざした。なお、必要に応じて大学・教育委員会が実践展開を支援し、授業改善の裾野を広げる方策の充実を学校単位で探った。

校内研修での先生方へ動機付けのビデオ教材として、「カリキュラム開発のための地域調査入門」を製作し、手軽に研修が実施できるようにした。

3. 開発組織

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
1	信州大学全学教育機構 准教授	小山 茂喜	研究代表：総括、カリキュラム開発 デジタル教材開発・校内研修支援	教育方法・ 情報教育
2	信州大学全学教機機構 准教授	庄司 和史	庶務：連携推進、校内研修支援	特別支援教育
3	信州大学全学教育機構特任教授	千村 重平	研究：実践授業支援	現職経験者
4	信州大学全学教育機構特任教授	近藤 守	研究：実践授業支援	現職経験者
5	長野県教育委員会教学指導課長	北沢 正光	機関代表：所管教育機関との調整	連携先
6	長野県教育委員会指導主事	田畑 卓郎	庶務：連携推進・授業支援	〃
7	長野県総合教育センター企画計画部長	石塚 弘登	研究：研修内容の企画調整	〃
8	長野県総合教育センター専門主事	市瀬 研一	研究：カリキュラム開発	〃
9	長野県総合教育センター専門主事	河手 正彦	研究：校内研修支援	〃
10	長野県総合教育センター専門主事	春日 隆史	研究：校内研修支援	〃
11	長野市教育センター長	宮下袈裟登	研究：研修内容の企画調整	(中核市)
12	長野市教育センター指導主事	中村 康則	研究：カリキュラム開発	(中核市)

Ⅱ. 開発の実際とその成果

1. 実践研究（身近な地域を生かした授業改善）講座

○研修の背景やねらい

子どもたちの生活の基盤は、彼らが生活する地域である。その意味で、学習指導要領が示すように地域の実態に応じて教育課程が編成され、地域素材を学習対象に教育実践が展開されるならば、子どもたちは学習内容を自らの課題としてとらえて追究する学びになる。

しかし、現実には社会の変化にともなって、住民と地域社会との関わりが薄くなり、保護者を含めた地域住民が、地域の特色というものを知らないで生活していることが多くなってきたことと、教師も地域の自然事象や社会事象について研修をする機会がなかなかとれないことから、地域の素材を教材化して授業を展開することは、かなり難しい状況にあるといえる。その意味で、授業者が地域を知り、子どもたちにとって身近である地域の素材を、授業者の教育理念をベースに教材化し実践する地域に根ざした教育課程の編成法のための研修が必要とされている。

そこで、本研修のねらいを「地域に根ざしたカリキュラム開発と日々の授業改善のための基本的視点の習得」とした。

○対象、人数、期間、会場、日程、講師

対象…公開研究授業の発表を予定している小・中学校教員（年次制限なし）

期間…5月下旬から2月末まで

人数…20名

会場…長野県総合教育センター、長野市教育センター等

日程…下記の通り実施。1講座6回程度の集合研修を実施。

【長野県総合教育センター関連研修講座】（社会と理科で2講座開設）

5月29日、6月2日、7月3日、7月13日、8月4日、8月24日
10月2日、10月9日、10月20日、11月6日、11月14日、
12月19日、12月22日、2月2日

【長野市教育センター関連講座】（情報と社会で2講座開設）

6月4日、6月9日、6月22日、7月7日、8月28日、9月9日
10月2日、10月14日、10月28日、11月13日、12月18日

講師 信州大学全学教育機構准教授 小山茂喜
信州大学全学教育機構准教授 庄司和史
信州大学全学教育機構特任教授 近藤 守（小・中学校長経験者）
信州大学全学教育機構特任教授 千村重平（高等学校長経験者）
長野県総合教育センター専門主事 河手正彦
長野県総合教育センター専門主事 春日隆史

○各研修項目の配置の考え方

集合研修で得た知見を、自校に戻り OJT 型研修を立ち上げることを伝達講習と位置づけ、5つの課題を設定し研修内容を3段階に配分した。

(課題)

- 課題1 地域の素材をどのようにして教材化していくか。
- 課題2 開発した地域教材を、どのようにすれば他の先生方の授業の素材へと発展させることができるか。
- 課題3 地域を知るという活動を、同僚性を発揮して顕在化させる方法を探ること。
- 課題4 日常の授業実践の中で、つまずいたり、失敗した経験を、別の授業でもしくは他の先生が活用していく方策を探ること。
- 課題5 教師の無意識の意思決定が、授業の中で及ぼしている影響について、自分自身の授業を振り返ることで、授業改善に生かす方策を探ること。

(配分)

第1段階…集合研修①…「地域を知る」という体験的な教師の研修活動を日常業務の中で無理なく展開するための方法を、習得することを目標とした。

集合研修②…地域の特性を生かした授業づくりの例を示すことで、地域の教材研究や教材化の手法について技能を習得することを目標とした。

集合研修③…子どもたちと楽しい授業を展開するための授業改善の方策として、教師が無意識に行っている意思決定を自覚することで、教師自身の内面で行なわれている思考操作を見直し、自らの課題を顕在化させることで、次の時間からの授業改善に生かせる何かをつかむことを目的とした。

第2段階…伝達講習①…受講者が各自の所属校に戻り、集合研修で得た知見を活用して、校内での同僚性を生かした OJT 型研修の展開を試みる。

伝達講習②… OJT 型研修で行なった地域素材の教材化と授業設計の成果を授業を通して広く公開し、効果を周知する。

授業設計や教材開発については、必要に応じて、大学の教員や専門主事が支援する。

第3段階…集合研修……第2段階の成果を分析し、次の課題を見だし、次の展開へとステップアップする。

○各研修項目の内容、実施形態、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
地域に根ざしたカリキュラム開発	6	授業改善のあり方について学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の意思決定に焦点を当てた授業改善についての内容の講義を実施した。 ・自作プレゼン教材使用して説明した。 ・受講者の課題意識をいかに引き出すかが以降の研修の鍵になるので、これまでの経験や教育観・地域の実態等についての情報が共有できるようにコミュニケーションを深めることが重要であった。 ・意思決定のあり方ふり返しシートへの記入を行い、各自の無意識の行動の原点を意識化させ、次の指導への方策を考えさせた。
地域素材の教材化	6	地域を知る方法(含教材化)について学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ・どのようにして地域を知り、その内容を学校教育に位置づけるについての講義と演習を実施した ・地域調査の方法について学んだ後、実際に調査活動等を行ない、調べた結果について受講者同士で検討することで、学校に戻ってからの展開方法を体験を通して学ぶことがポイントとなった。 ・開発ビデオ「地域調査入門」の視聴と、副読本の作り方のテキストを参考に技能等を習得させた。 ・地域の実態把握確認シート等を活用した。
OJT 型研修体制の開発	1 2	OJT 型の研修について実践する	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に戻り学校の実態に合った OJT 型研修の研修のあり方を探り、学年会や教科会等で実践した。 ・地域素材の教材化を試み、公開の研究授業を実施し、広く地域の素材や地域に根ざした授業構成のあり方を周知した。 (各地区での教育課程研究協議会での公開授業研究の授業者が受講者だったことから、広く周知することができた。) ・学年会や教科会、学校行事等をうまく活用して、地域を教員が知る活動をどうしたら生み出せるかを探らせる。 ・教材開発や実践授業については、大学の教員

			<p>や専門主事等が必要に応じて支援することが重要となる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2学期にさまざまな活動が集中してくるので、8月以降1ヶ月に一度程度受講者の情報交換の場としての研修を開講することが望ましい。
研究内容の分析	6	研究の成果を分析する	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に根ざした教材作成と、それを活用した授業実践についての分析を行なった。 ・各校で試みた地域を知る OJT 型研修の実践について検討し、広く参考にしてもらおうように成果を実践報告書の形でまとめた。

※参考資料：長野県総合教育センターでの研修日程と内容の実際

- 5月29日…社会科にかかわる授業改善について（講義）（6名）
- 6月 2日…理科における授業改善について（講義）（2名）
- 7月 3日…理科における教材研究のあり方（講義・実習）（2名）
- 7月13日…社会科における教材研究のあり方（講義・演習）（6名）
- 8月 4日…理科における教材研究（実習）（10名）
- 8月24日…社会科における地域教材研究（講義・演習）（6名）
- 10月 2日…社会科における地域教材研究中間発表（演習）（6名）
- 10月 9日…理科における教材開発研究中間発表（公開研究授業）（40名）
- 10月20日…社会科における教材開発中間発表（公開研究授業）（56名）
- 11月 6日…理科における授業実践の分析（講義・演習）（2名）
- 11月14日…社会科における授業実践の分析（講義・演習）（3名）
- 12月19日…社会科における授業実践の分析（講義・演習）（3名）
- 12月22日…理科における授業実践の分析（講義・演習）（2名）
- 2月 2日…成果発表（演習）（8名）

○実施上の留意点

- ①受講者の問題意識に沿う形で、1年間を通して研修を行ない、それぞれの学校に対応した形での OJT 型の研修のあり方を探ることが重要である。
- ②受講者の条件として、その年公開研究授業を予定していることが、近隣の地域の先生方への伝達講習にもなるので望ましい。
- ③伝達講習として、OJT 型の研修を実践する中で発生してくる課題を解決するために、途中経過の確認を2ヶ月に一回程度入れることが望ましい。
- ④地域素材をどのように教材化し、カリキュラムに位置づけていくかという作業に関わって、専門主事や大学の研究者等が必要に応じて、学校に出向いて支援する

ことが学校の実態に応じた研修プログラムの開発には必要である。

⑤受講者の所属校が継続的に OJT 型の研修を実践していくために、1 年間の成果を確認する場を設定することが必要である。

○研修の評価方法、評価結果

①評価方法

- ・公開研究授業を実施し、OJT 型の研修のあり方について、周知も兼ねて授業参観した先生方に評価してもらった。
- ・1 年間の実践の経過を、自己の変容と他の教員の変容の両面に焦点を当ててレポートをまとめ、発表会で受講者相互で評価を行なった。

②評価結果

経験年数も実際に指導されている学年、地域とすべて異なっていたが、楽しい授業を作りたい、自分の授業をよい授業にしたいという共通の思いがあり、授業公開も積極的に展開するなど前向きな取り組みが見られた。

OJT 型の研修を実践することで、以下の課題どのように解決するか各校で模索してほしいと先生方に課したところ、当初は「そんなこと言ったって」という意識であった。

しかし、1 学期も終わる頃になると、そんな先生方の姿勢に変化がみられるようになった。自分自身の教職経験を、互いに語ることで、授業改善の方向性が少しずつ見えてきたようであった。教育という営みは、教室という狭い空間の中で、非常に特定性の高い内容が展開されている。時折、研究授業という公開の機会はあるが、ほとんどは閉鎖された環境の中で、教師一人の能力にすべてを任された形で教育は行われている。そのため、他の先生に自分の授業の問題点を、主体的にさらけ出すということもなければ、他の先生の教育に対して、何かもの申すということも少ないのが現実である。そんな先生方の思考を逆手に、180 度意識を転換して、授業というものを考えてみる機会になった。

教師の無意識のうちに行なわれている「こうすればこうなる」という授業設計の仮説は何を拠り所としたのか、また、授業の場面での発問や指示など「どうしてそうしたのか？」という点に授業研究の分析の視点に移り、授業での失敗経験が次の授業に生かされ、異なった場面で同様のつまづきが発生した場合でも、機転を利かせて対応できるようになった。

また、子どもたちの生活している地域の教育に関わる資源を教師が再認識し、学校教育の中に再度取り込もうとしたことで、学校教育と地域とが連携した楽しく活力ある学びの創造がみられた。

(OJT 型の研修の実践例)

(ア) 自らが教材開発した地域の素材の内容について、自らが講師となって職員研修として組み込み周知した。

- (イ) 学年会などで教材開発の手法を、後輩の先生へ積極的に示すようにした。
- (ウ) 学年会という組織を有機的に動かすために、日々の授業実践を細切れの活動とせず、子どもたちの「わからない」と先生方の「こまった」を連続的にとらえるための情報共有の場として設定しなおし、実践に即した分析追究を行えるようにした。(必要に応じて、研究者も学年会に参加し、支援を行なった。)
- (エ) 遠足など学校行事の下見を、単なるチェックに終わらせず、地域研究の場として併用し、効率よく地域を学ぶ場として活用した。
- (オ) 地域の育成会との連携を密にし、教材研究や授業において支援をしてもらうことで、子どもと教師ともに無理なく地域の伝統を学ぶ場を設定した。
- (カ) 教師の意思決定について意識することを、授業研究の視点として加えたことで、研究授業の分析が、授業者個人の内容分析から、参観した先生方個々の授業の見返しへと変換した。

○研修実施上の課題

①受講者数について

集合研修といっても、受講者に対しての個別指導もしくは所属校への個別支援のウェイトが高いことから、少人数での研修講座となってしまう、教育センターでの研修講座の効率性から考えると課題が残った。

ただし、成果を公開研究授業で発表していることから、伝達講習としての機能は十分に発揮できるものと考ええる。

(参考) 長野県総合教育センター「実践研究講座」募集要項

研修日程) 年間5回程度

対象者) 小学校・中学校・特別支援学校教員

研修種目・募集人員) 希望研修(10年研修可) 5名程度

概要) 各自テーマを決めだして、研究・実践します。

計画にそって集まり、研究協議をしながら研究を深めます。

年度末にレポートを作成し、研究の成果をまとめます。

授業を公開(参観)して研究することもできます。

②実施期間について

年間を通して実施する追跡型の研修のため、校外に出での研修時間が増えてしまうことから、受講希望者が研修を受けやすい環境を作り出すことが重要となる。

③公開研究授業との関係について

実践研究講座は希望研修で授業の公開等は必須内容ではなかったが、受講者のほとんどが公開研究授業を控えて、どのように研究を進めていったらよいのかが課題意識であった。結果として、成果を広く周知することができ効果的であったが、

当初から授業を公開することを想定することか望ましい。

④所属校の理解について

OJT 型の研修は、学校全体を巻き込んで展開することで効果が上がるものであることから、受講者の所属校での理解をどう得るか学校任せになってしまう点が課題である。

Ⅲ 連携による研修についての考察

長野県総合教育センターの既設希望講座である「実践研究講座」との連携で、講座を開設することができた。この講座は、受講者の課題意識を大切にして、1年間かけて研修を行ない成果を所属校に還元することが求められていた。

しかし、実際には受講者のステップアップについては効果が上がっていたが、伝達講習としての機能はあまり発揮されていたとはいえ、課題とされていた。

そこで、今回のプログラム開発では、カリキュラム開発は、教育思想・社会の要請・指導生徒の実態・地域の実態等を総合的に組み合わせて行うものであることから、この4点にかかわる技能をバランスよく集合研修を通して高め、教員の資質の向上深化を図り、その研究過程を自校の OJT 型の研修の展開に組み込むことを受講者に課したことから、「実践研修講座」の課題は解決されたといえる。

プログラム開発推進にあたっては、すでに信州大学全学教育機構と長野県総合教育センターとの間において、包括的な連携協定が締結されており、大学の教科指導法の授業を総合教育センターの専門主事が担当したり、総合教育センターの講座に大学教員が担当する講座を組み込んだりと、通常業務の中でも連携が日常化しており、連絡も密に取り合っていることから、今回のプログラム開発においても、双方の担当者間での意思疎通が潤滑に行なうことができ、受講者に対する支援の役割分担も問題なく実施することができた。

今回の連携においては、研究者と実践者並びに実践指導者の三者が同じステージに立って協働で研究を推進し、学校現場の意識変革を目指したことから、最新の研究成果を容易に学校現場に反映させることができると同時に、研究の場に教育現場の実態を伝えるよい機会になったといえる。

特に、受講者は公開研究授業などの実践研究の発表の場が設定されていたことから、校内において本講座で得た地域に根ざしたカリキュラム編成や教材開発の手法などに関わる知見や自身での研究成果を、他の教員に無理なく伝達することができる環境が設定されていたことと、公開研究授業に向けて先生方が協働で研究を推進しなければならないという状況が作られていたことで、受講者がコア・ティーチャーとなって OJT 型の研修がスムーズに受け入れられたといえる。

今後の課題としては、研修を受講する教員の所属校での位置づけを明確にし、OJT 型の研修のコア・ティーチャーとして力を発揮できるシステムを各学校内で構築していくことが重要である。

また、地域についてまず先生方が知るという活動を活発化するための方策として、今回作成した研修用ビデオとワークシートなどを、校内研修で活用してもらうための周知について工夫をしていく必要がある。研修用の教材は数多く制作されているが、教育現場ではそれら教材の存在が理解されていないことが多く、せっかくの研修機会が失われている状況もみられるので、周知方法などを工夫していく必要がある。

授業改善について、学校現場と大学教員や指導主事・研修主事との関わり(支援)を、これまで以上に密にしていくことで、即応性のある研修が各校で展開可能になっていくと考える。

IV その他

[キーワード] OJT型研修 授業改善 地域素材 地域調査 教材開発 公開授業
協働 コミュニケーション コア・ティーチャー 研修用ビデオ

[人数規模] D

[研修日数] C

【問い合わせ先】

国立大学法人信州大学 学務課

〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1

TEL/FAX 0263-37-2417 / 0263-36-3044

E-mail campus-edu@shinshu-u.ac.jp



地域の活用で授業が変わる




評価の意義と目的 一つの出来事も立場を変えると、多様な見え方・多様な意味をもつ

アカウンタビリティ(説明責任) = 「**帰責性**」

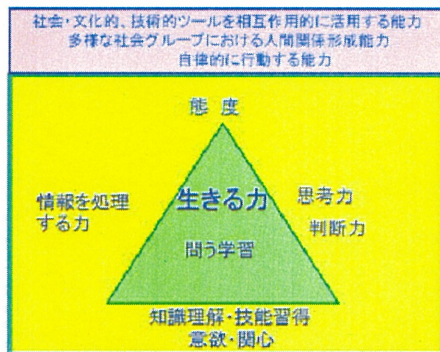
内容(content) → 「**認知(cognition)**」「**文脈(context)**」

結果に対する責任 → **授業や教育の影響(変化)** に対しての明確な責任



- 教師が自分の授業の結果についての情報を得る (Knowledge of Results)
- 学習者の動機づけを目的として学習者に学習の成果を公開する
- 教師が自分の授業の妥当性や正当性を自ら確認する
- 授業改善のための次なる課題を発見する

単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力



教育課程編成の基本原則

- ① **学校の主体性の重視**
 - 1 状況分析、2 目標の明確化、3 教授-学習プログラムの設計、4 教授-学習プログラムの解釈と実施、5 教育評価
- ② **保障すべき学力水準(スタンダード)**
- ③ **結果からさかのぼる設計**
 - ① 教育目標の設定、② 評価法の決定、③ 学習経験・教授方法
- ④ **マクロの設計とミクロの設計**
 - 年間計画と単元や授業との整合性

言語活動の充実

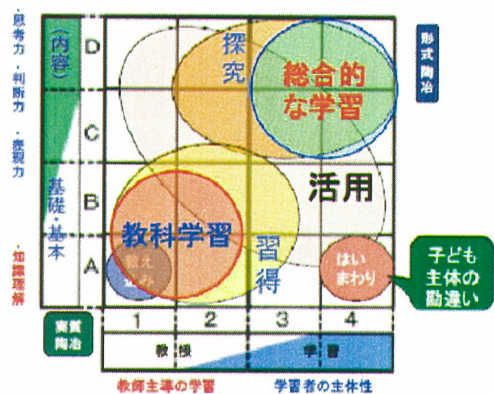
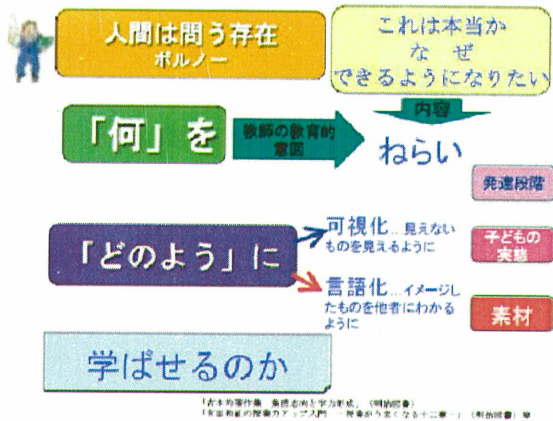
本来人間は知的好奇心のかたまり

誰でも野次馬

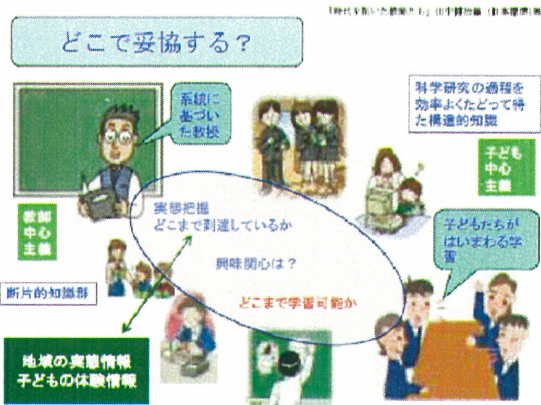
知らないことを知ることの楽しさ

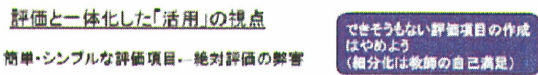
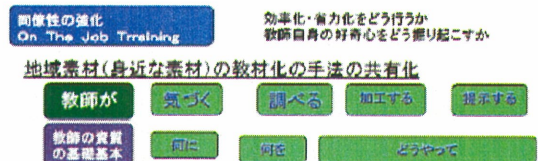
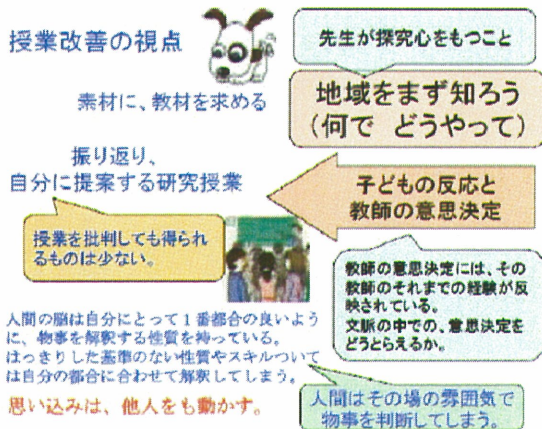
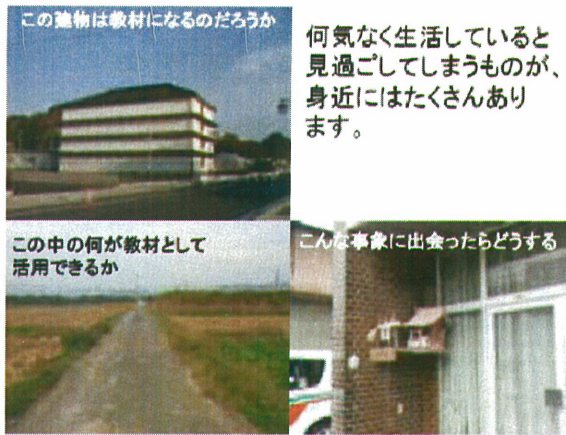
学習意欲をどう引き出すか

どうかかわるのか



- 授業とは**
1. 特定性...特定の子ども、特定の先生、特定の内容、特定の時間、特定の空間
 2. 複合性...子どもにあった内容、方法、問いかけを複雑な構造の中で選択
 3. 教師の意思決定...教材解釈、展開、学習形態、問いかけ等
 4. 実践の見直し...子どもにとっての意味、教材解釈の妥当性、展開、学習形態、問いかけ等
- 【明石啓章の授業】 稲垣文彦 (訂論社) 等

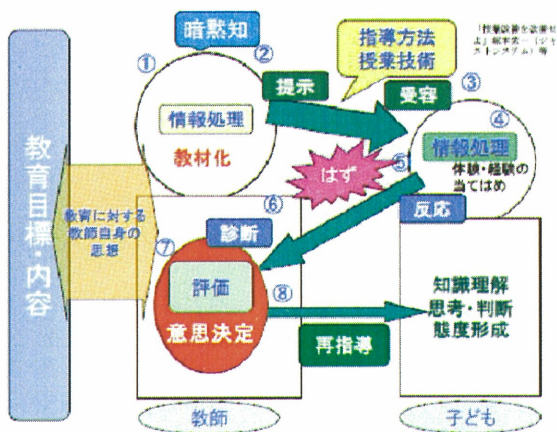




日々の学習活動の充実を→概念獲得を問う評価から、日々の生活への適応を問う評価問題の作成へ。習ったことをもとに、習っていないことを解決する問題へ。Ex 新聞を読んでいないと解けない問題

教師の意思決定の見直しによる授業研究

「事例から学ぶ指導力向上のための授業デザイン」 佐藤勝太郎(著) 教育出版



以心伝心

日本人の特性？

高学キリスト社会

状況の中にいくつかの情報が含まれているから、何も言葉ではっきりと意思表示したり、明らかに分かるような顔の表情をしなくても、自分の意思伝達は十分にできる。

文脈での判断

こまごまささないといけない現代の子どもたち

※「教師のパフォーマンス入門」金子書房 佐藤綾子 1996

[実態チェックシート]

—— 自校の実態と自分自身の課題を確認してみよう ——

1. 日常の学習における授業を展開する上での課題は(個人として)
2. 勤務校における授業改善の実態は
3. 地域の実態に即した授業改善について
4. 同僚性を発揮する研修や授業改善について(視点:現状・試み・期待)
5. 研修のあり方について

教育課程編成のための地域を知る視点と調査方法

1. 地域の素材を活用する視点

- ① どこに・どのようなものが・どのように広がっているのか、諸事象を位置や空間的な広がりとの関わり。
- ② 社会事象や自然事象について、なぜ・そこで・そのようにあるのかという背景や要因と、地域の人々の生活との関わり。
- ③ そこでしかみられない事象なのか、他の地域にもみられる事象なのか、地域の特殊性と他地域との共通性。
- ④ 事象は、いつごろからあるのかといった歴史性。

2. 地域の実態を確認するポイント

キーワードは「暮らしの中の文化」「見慣れた景観」

- ① 地域の行事日程
- ② 地域の歴史
 - 地名の由来
 - 神社・寺院
 - 総括的な歴史
 - 産業の変遷
 - 集落の成り立ち
 - 自然科学的な歴史
 - 災害史
 - 史跡等
 - 石碑等
- ③ 伝統文化
 - 食生活の歴史
 - 慣習
 - 伝承
 - まつり
 - 方言
- ④ 自然環境
 - 植生分布
 - 生息生物等
 - 地質
 - 土壌
 - 河川
- ⑤ 地域にある施設

地域素材を分析する視点

(吉本哲朗著「地元学をはじめよう」
岩波ジュニア新書(2008)参照)

- つなぐ
[例] 海・湖沼・川・山・道などをつないでいくと何かがみえてくる
- 重ねる
[例] 道・等高線・歴史的建造物などを重ねてみる
食べ物と季節を重ねてみる
道と農地を重ねてみる
川と道を重ねてみる
- はぐ
[例] 現状から、新しいものをはぎとってみると、以前の状態がみえてくる

みえてくるものの例

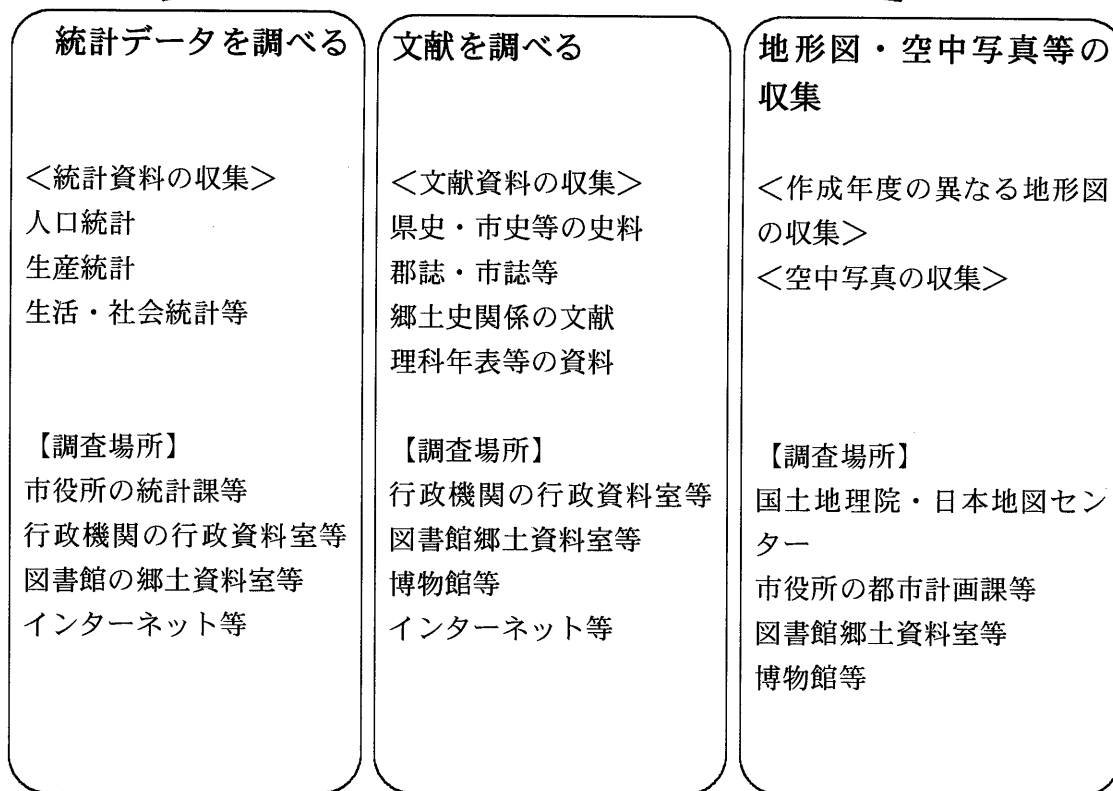
水のゆくえ・ごみのゆくえ・有用植物の分布・水生生物の分布・魚の分布・樹木マップ・遊びの変遷・食べ物暦・野の草花暦・集落の成り立ち・職人マップ・商業マップ・風土とすまい・生き物マップ・自然神マップと文化・物流の歴史 等

3. 地域素材の調べ方の基本

地域事象に関する興味・関心 ————— 地域の景観観察

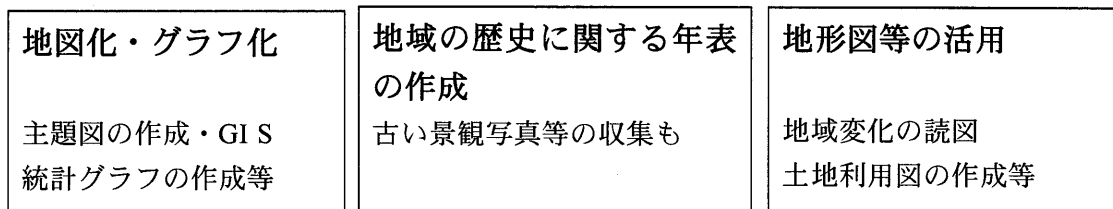
地域事象に関する問題意識

調 査



図書館等でのレファレンスサービスの活用

聞き取り調査やアンケート調査



○ 地域に根ざした授業改善のためのポイント

研修用ビデオを視聴後、以下の研修を実施し、日常の教育実践を効率的に授業改善研修に活用したいものである。

(1) 地域の行事計画を確認しよう

まず、学校の年間行事計画を立案する際に、地域の行事計画も確認しておくことが大切である。育成会等の学校教育に関係の深い団体の行事については、学校への連絡もあるので確認は容易であるが、地域の祭りや習わしに関わる行事計画は、地域の役員に確認しないとわからないことが多いので、学校側からアプローチしなければ情報を入手することはできない。教師の側から地域の役員の方にアプローチするということは、地域に学校が溶け込んで行くということになり、地域と学校との交流の機会が広がると同時に、学校が持っていない情報も収集できる可能性も生まれるのである。

地域の行事の中には、学習で取り上げたい事象がたくさんあり、地域の動きと学校での学習が同期すると、子どもたちの学習もダイナミックになると同時に、学校教育に対する地域からの理解も得られやすくなるといえる。

(2) 地域の実態確認チェックしてみよう

教職員がどの程度地域の実態を把握しているかについて、年度当初チェックしてみることも大切である。素材として何があるのか、どの学年のどの学習内容に関連づけられるかという視点で、チェックシートで確認してみることである。

すべての教職員が、すべての内容について把握しているということはありませんので、教職員間で内容を確認して、情報を共有するという研修に位置づけたい。在籍年数の多い先生から、新任の先生等への情報伝達の良い機会になり、まさに同僚性が発揮される場となる。確認した内容は一覧表にしたり、地図に示したりして、わかりやすい形でまとめておくと、教材研究の際に有効な資料となる。

また、教職員の理解度に応じて、職員研修等の計画も立てやすくなっていく。

(3) 地域に出る機会を作ろう

校務の多忙化にともなって、教職員が地域に出て実態を把握するという機会が減ってきているのが現実である。子どもたち登下校の指導や、校外学習の下見等のちょっとした機会を、地域を知るチャンスととらえて、利用するように心がけることが大切である。

子どもたちとの日常会話の中でも、地域の情報がたくさん出てくるとが、その内容について確認しておく、子どもたちとの信頼関係も強固なものとなってくる。ちょっとした機会をみつけて、校区を歩いてみたいものである。

時間がとれば、職員研修として地域探訪等短時間で行うことが望ましい。その際は、可能な限り同僚性が発揮できるように、在籍年数に応じて同僚の先生が先導役になれるように、枠組みを作っていくことも大切である。

その際、前述の地域をみる視点を意識して、見て歩くことが大切である。何気なく見過ごしていたものが、偶然性の中で目にとまるものである。

(4) 教師の意思決定に注目してみよう

授業は、教師と子どもたちとの対話、つまりコミュニケーションによって成り立っている。その中でも、教師の側からの発問や指示が大きなウェイトを占めている。

授業がうまくいったと教師が感じるときは、それら発問や指示に従って、子どもたちが教師の意図したように活動してくれたり、教師の意図とは「ずれた」としても、子どもたちの課題としてとらえて、子どもたちが主体的に活動してくれたときであろう。

しかし、現実には「うまくいった」と感じられる授業を体験できることはそれほど多くなく、大方は失敗とはいわないまでも、不満が残る活動になってしまうことが多い。そして、なぜうまくいかなかったのかという原因追究を、学習内容や教材や発問の仕方等に求めてしまうことが多い。

確かに、学習内容や教材とそれに連動して現れてくる発問や指示の仕方は、現象として記録も可能なことから、評価がしやすく分析もしやすいので、即効性のある改善策を見いだせると誤った判断をしがちである。

ところが、授業は特定性の高い活動であることから、長い教職経験をもつ教員でも、同じ教材を使っても全く授業を経験するということがないことに気づくはずである。

そこで、根本的な授業改善という視点から考えるならば、外に現れてくる現象を分析すると同時に、その表現の根本原理となっている教師の意思決定の過程を、じっくり振り返ることだと考える。

研究授業の研究会で、こんな対応をすれば良かったのではといった議論がよくなされるが、それは教材研究の域を脱しておらず、次の別の授業の時に生かされることは少ないのが、特定性がかかえる大きな問題なのである

次の授業に本当に生かせるものは、授業を制御している教師の無意識のうちに行なっている意思決定の法則を分析して、そこに潜む問題を引きずり出して、教師自身が自覚するということである。

「なぜ、このような発問をしたのか」「なぜあのような指示をしたのか」「子どもの発言や行動に対して、自分はどのように判断したのか、それはなぜか」といった、ごくごく基本的なところをふり返り、そのことについて他の先生方に意見を伺うということが、授業を改善するには有効であると考えられる。

授業の中で現れてくる表現は、ある意味コミュニケーションの対処の結果であって、いつも同じとは限らないのである。いつも同じなのは、その対処法を制御している教師の意思決定の原理なのである。そう考えると、対処療法的に授業を研究分析しても、別の場面では、別の形で同じような失敗を繰り返すことになるのである。

授業には、時と場合に応じた教師の機転が要求されていることを考えると、その機転の源をチェックすることが、どんな場合でも活用できる改善策を見いだすことになるのである。特に教師の意思決定には、その教師のそれまでの経験が反映されており、その教師自身の文脈の中での、意思決定をどうとらえるかが最大の課題なのである。

そのことが話題にされ、いろいろな参考意見が出される可能性があるのは、改まった研究会の場ではなく、先生方の日々の授業をふり返る日常会話なのである。

On The Job Trainingとは、まさにそういった日常活動の中に潜む研修の芽を意識することなのでもある。

チェックシート (地域の実態について理解していることを記入しよう)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
地域の行事日程 (祭りや行事)												
	どこで・何が・どのように いつごろ等の内容						扱えそうな学年					
							1年	2年	3年	4年	5年	6年
地名の由来												
神社・寺院												
総括的な歴史												
産業の変遷												
集落の成り立ち												
自然科学史												
災害史												
史跡等												
石碑等												
食生活の歴史												
慣習												
伝承												
まつり												
方言												
植生分布												
生息生物等												
地質												
土壌												
河川												
地域にある施設												

地域の実態をふまえたカリキュラムづくりというけれど
どうやったらいいのかな

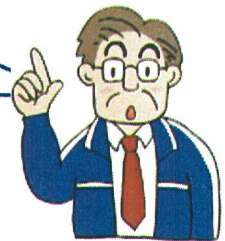


子どもたちが主体的に学ぶ授業改善のポイントとして、地域の実態をふまえたカリキュラムや、地域素材の教材化ということがよくいわれるけれど…。

私自身、この学区のことよくわかっていないし…。

どうしよう…。

カリキュラムを作り上げていくということや、授業改善に取り組むということは、学校の先生方みんな知恵を出し合うことです。つまり、先生一人で、「どうしよう」と悩むのではなく、みんなで協力しあうという雰囲気を作り出すことが大切です。



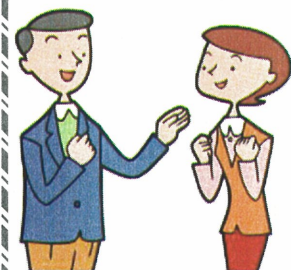
今、よりよい教育実践の実現に向けて、学校の活性化が問われています。教職員一人一人の資質能力の向上や、学校がかかえる課題の解決に向けて、全教職員が協力して取り組む活動が求められています。

そのために、学校としては自己研修だけでなく、全教職員で日常的な業務の中で無理なく実行できる校内研修のあり方を検討し、計画的・組織的に取り組むことが重要となります。

子どもたちが、主体的に学ぶ機会を作り出すには、子どもたちが生活している地域に根ざした教育活動を展開することが大切になってきます。地域の実態に応じたカリキュラムを編成するには、全教職員が地域についての共通理解が必要不可欠になります。

地域を知るための研修は、日々の授業のための教材開発そのものにつながり、教職員一人一人の資質能力が向上し、学習が活性化し子どもたちの確かな学力と、豊かな人間性を育てることにつながります。

校内研修の充実



- よりよい教育実践を作り出すために
- 教職員一人一人の資質能力の向上を図るために
- 学校を活性化させるために

= On The Job Training =

- ・日常の中での研修の充実を
- ・先生自身が楽しめる研修を

研修は必要というけれど
条件(環境)づくりはどうやったらいいのかな



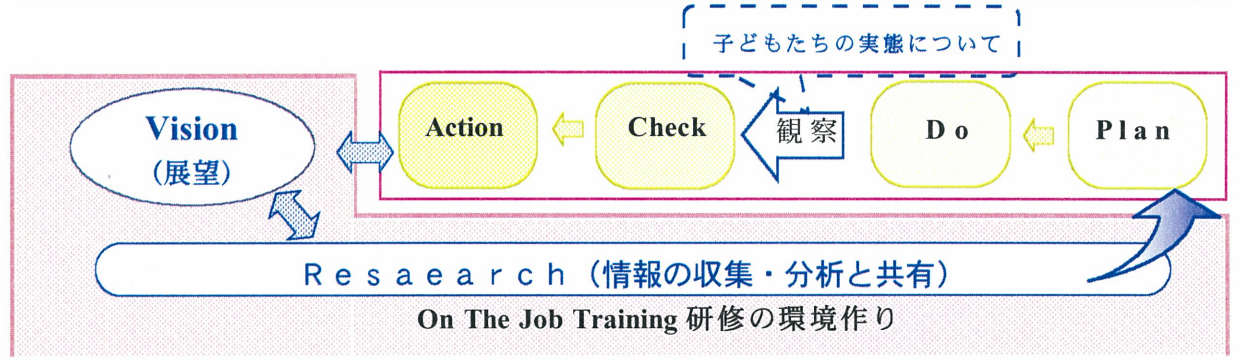
教職員一人一人が、「地域に根ざした授業改善に取り組もう」という気持ちをもって実践に取り組むには、全教職員で「なぜそのことが必要なのか」「どうすればよいのか」といったことを理解したり、納得したりする場を設定することも大切です。

そのためには、「なぜそのことが必要なのか」という根拠となる情報を、教職員間で共有することが大切になります。

また、特別な時間を設定して行なわなければならないとなると、負担感が先に立ってしまい、継続した活動になりません。日常の教育実践と教職員間で行なわれている情報交換の場を、視点を変えて研修の場と環境を変換させることが、具体的かつ効率的な方策となります。OJT型の研修がうまく機能するか否かは、組織内における人と人の関わり方、つまり教職員間のコミュニケーションがうまく行なわれるかに負うところが大きいといえます。

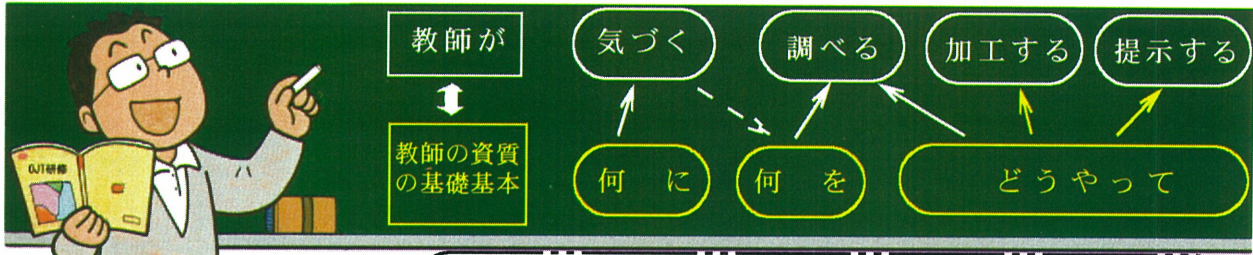
協働意識を高めるポイントは、「情報の収集・分析と共有」と「展望」を明確化させることです。

Plan(計画)→Do(実行)→Check(評価)→Action(改善)といったPDCAサイクルが、授業改善の基本とされていますが、そこに「Research(情報の収集・分析と共有)」、「Vision(展望)」をうまく組み込んで、先生方同士が、自分が得た情報を他の先生に話したくなるような環境や、そういった情報に先生方みんなが関心を持つような職場環境を、作り上げていくことが大切です。



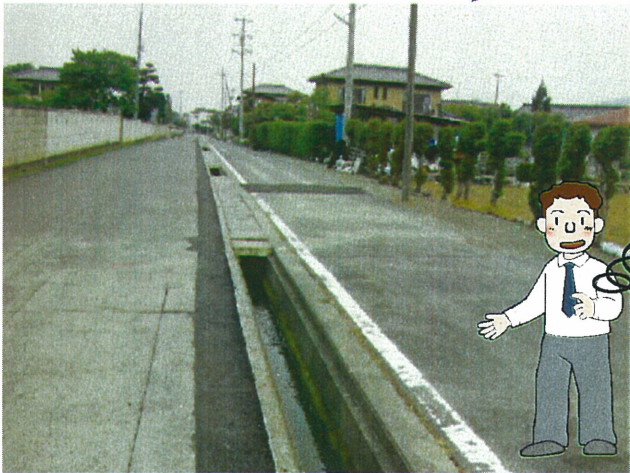
地域素材の教材化のため視点
On The Job Training のポイントは発想の転換

地域素材(身近な素材)の教材化の手法の共有化をOJTで



教師自身の好奇心をどう掘り起こすかがポイント

日常生活の中に素材は たくさんある。



地域にこんな場所があったら。歩きづらいと思って、そのまま何もせず通っているのか、何か訳があるのか調べてみようと思うかが、OJT型研修が機能するかの分かれ目です。

[ポイント]
まず、「へんだぞ!」
「どうなってるかな?」
という意識(気づき)が持てるか。
次に、文献などで調べるといふ行動がとれるか。
そして、「どの授業で使おうかな」と学習の場での活用を想定できるか。

そうなんですか。私、地域のことに知らないで授業していたわ。もしかしたら、江戸時代の名残のもの、まだ残っているかもしれないですね。子どもたちに調べさせるともおもしろくなるかも…

さすが、勉強家! 授業に使えるじゃないか。今度の学年会までに、お互いもう少し市誌で詳しく調べておいて、ちょっと外へ調べに行ってみようか。

情報を共有することは、「聞き上手」になることと、「話し上手(ある意味自慢上手)」になることです。
日々の実践や生活の中で気づいたことをお互いに聞きあうことが、新たな授業の創造につながります。



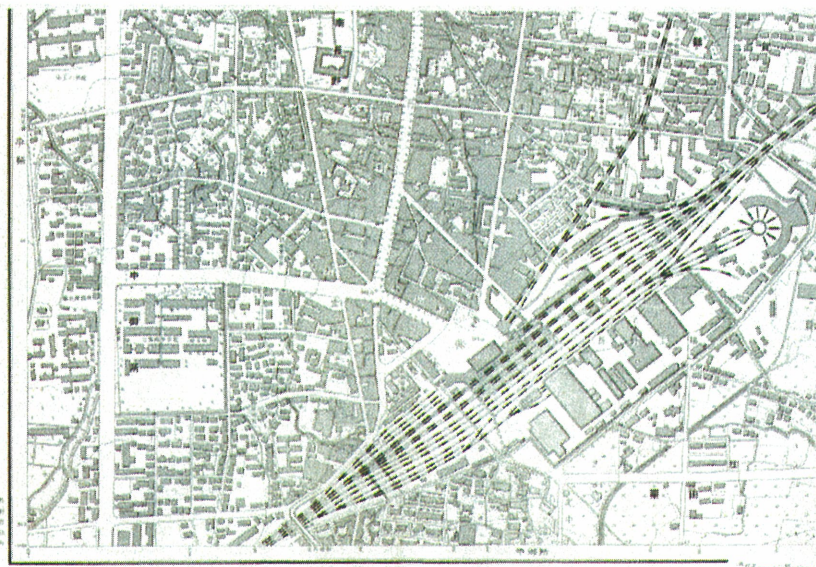
学年会での何気ない会話

あの道、何か秘密があるんじゃないかと思って、ちょっと調べてみたら、江戸時代の道の名残のようなんですよ…

新旧の地図を比較して、地域の変遷を学ぼう

学区の新旧の地図や航空写真を調べてみよう

地図を片手に、歩いて(フィールドワーク)、学んで、教材化へ



昭和27年の長野駅前

国土地理院 1/2500 地形図

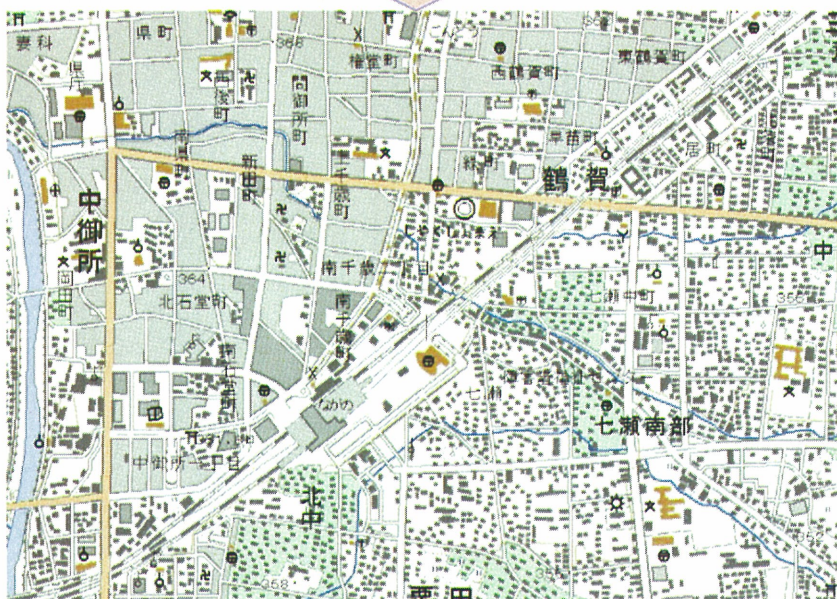
自然環境の変化を調べるのに、植生地図のようなものを作ってみてもおもしろいですよ。



鉄道や学校、それに病院も消えている！
どうしてかな？

平成14年の長野駅前

国土地理院 1/2500 地形図



学区の変遷については、新旧の地図で見比べると、一目瞭然です。

左の地図を見比べてみましょう。

まず、鉄道が1本なくなっていることに気がつきませう。

その鉄道は、どうなったのでしょうか？

よく見ると、鉄道のあったところは道路に変わり、地下鉄に変わっています。

なぜ、このような変化があったのかを調べてみるのが第一歩になります。

また、駅の南側の土地利用も大きく変わっています。

昭和27年は鉄道の工場と畑が広がっていますが、平成14年になると、工場はなくなり、畑もなくなって住宅地などに変わっています。

昭和27年に駅の西側にあった学校や北側にあった病院が、平成14年には姿を消しています。

地図上から消えてしまったものや、新しく出てきたものには、それなりの理由があります。

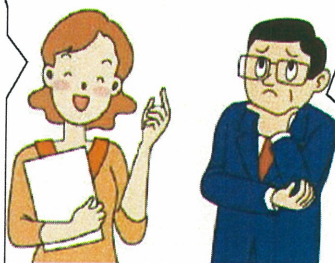
それらの理由を詳しく調べてみると、その地域の特色もわかってくるとものです。

自然環境にかかわるデータ(植生・花の開花など)を埋め込んでみるのも、その地域の実態を知る上では重要です。

コーチングの視点を生かそう On The Job Training のポイントその二

やる気もてる時

- ・ 取り組みのプロセスをほめてもらえた時
- ・ 成長を認めてもらえた時
- ・ フォローしてもらえた時



やる気をなくす時

- ・ 考えを押しつけられた時
- ・ 否定された時
- ・ 声をかけてもらえなかった時

学年会・教科会・授業研究会や職員室での打ち合わせなど、日常の業務の中に研修が行える場はたくさんあります。しかし、教師一人一人にその意識がなければ、せっかくの機会も生かされることはありません。

日々の実践の中で気づいたことやつまづいていることを、同僚性を活かした形でフォローする環境が作られてはじめて、OJT型の研修は成り立ちます。

生徒指導で提唱されている「カウンセリングマインドを持って子どもたちに接しましょう」という視点を、同僚の先生方とのコミュニケーションでも活用することが、まず第一歩です。同じく、先生方のやる気を引き出す手法として、コーチングの技法を活用することも重要な視点です。

授業研究でも、批判的に分析するだけでなく、授業の中で「なぜそのような判断をしたのだろう」という教師の意思決定を授業者がじっくりとふり返れるようにみんなで支えて考えることで、授業者の内側から改善策を見つけ出せるようにしてあげることが大切になってきます。

また、教師一人一人のちょっとした「気づき」を見過ごさず、みんなで発展・深化させていこうとする意識作りをすることが、教師のやる気を生み出し授業改善につながります。

「コーチング」とは、一方的に教えるのではなく、相手と対話するなかで答えをつかませる手法です。根本には、「その人が必要とする答えは、その人の中にある」という考えがあります。

「コーチング」では、まず「よく聴く」ことから始めます。そして、長所をほめることで「承認」します。さらに、問題点を一緒に話し合う中で、自らやる気と解決策をつかむように「質問」します。このようにして、その人自身で答えをつかめるようにしていきます。

人は「理」だけでなく、「心」や「体」で受け止めたことも含めて仕事をしています。したがって、「コーチング」で人間関係での支援的な雰囲気づくりを心がけたり、心身共に安心して仕事ができるような環境づくりを行ったりすることが「やる気」をもたらすことにつながると考えられます。

また、「コーチング」は、「聴く」「承認する」「質問する」3つのスキルを意識して会話することで、人のやる気を引き出すことができます。「コーチング」の主旨を理解して、日頃のコミュニケーションに生かしてみましょ。

課題の自覚と共有化

自校の特色や教師自身の特徴を分析してみよう

地域の実態をふまえた授業改善は、自校の実態がどうなっているのか、また、教師自身がどのような実践を展開しているのかを自覚することから始まります。

それぞれプラス面もあれば、マイナス面もあります。それらをどのように補完しあったり、新しい内容を追加したらよいかというアイデアを出し合う場作りから始めましょう。

[学校の環境要因を探ろう]

- ①学年会や教科会などで、一人一人が学校の内外にある環境要因の「強み」「弱み」「機会」「脅威」について考えられることを、書き出してみる。
 - ※ 内部環境要因: プラス面…「強み」、マイナス面…「弱み」
 - ※ 外部環境要因: プラス面…「機会」、マイナス面…「脅威」
- ②グループで、書き出された個々の意見を、再度「機会」「強み」「脅威」「弱み」分類する。
- ③分類した結果を分析し、OJT活用で改善可能な内容を探る。



(分類例)

	学校の内部的環境要因	学校の外的環境要因
プラス面	強み (Strength) 意欲的な授業研究 小規模なクラス	機会 (Opportunity) (支援的に働いている場合) 豊かな自然
マイナス面	弱み (Weakness) 地域との連携 給食の食べ残し	脅威 (Threat) (詐害的に働いている場合) 世代間文化の断絶

研修内容

地域の食文化を見直した食育について研究してみよう。
 ※地域の食文化の教材化をOJTで取り組もう。

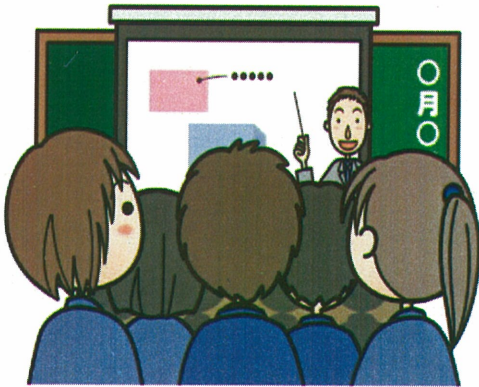
[自分自身をふり返ろう]

日々の教育実践を、カテゴリーごとにふり返って特徴を自覚してみよう。

	教材研究	学習指導	生徒理解	地域連携	校務処理
プラス面					
マイナス面					

日々の教育実践をふり返ってみよう

無意識下の教師の意思決定を分析してみよう

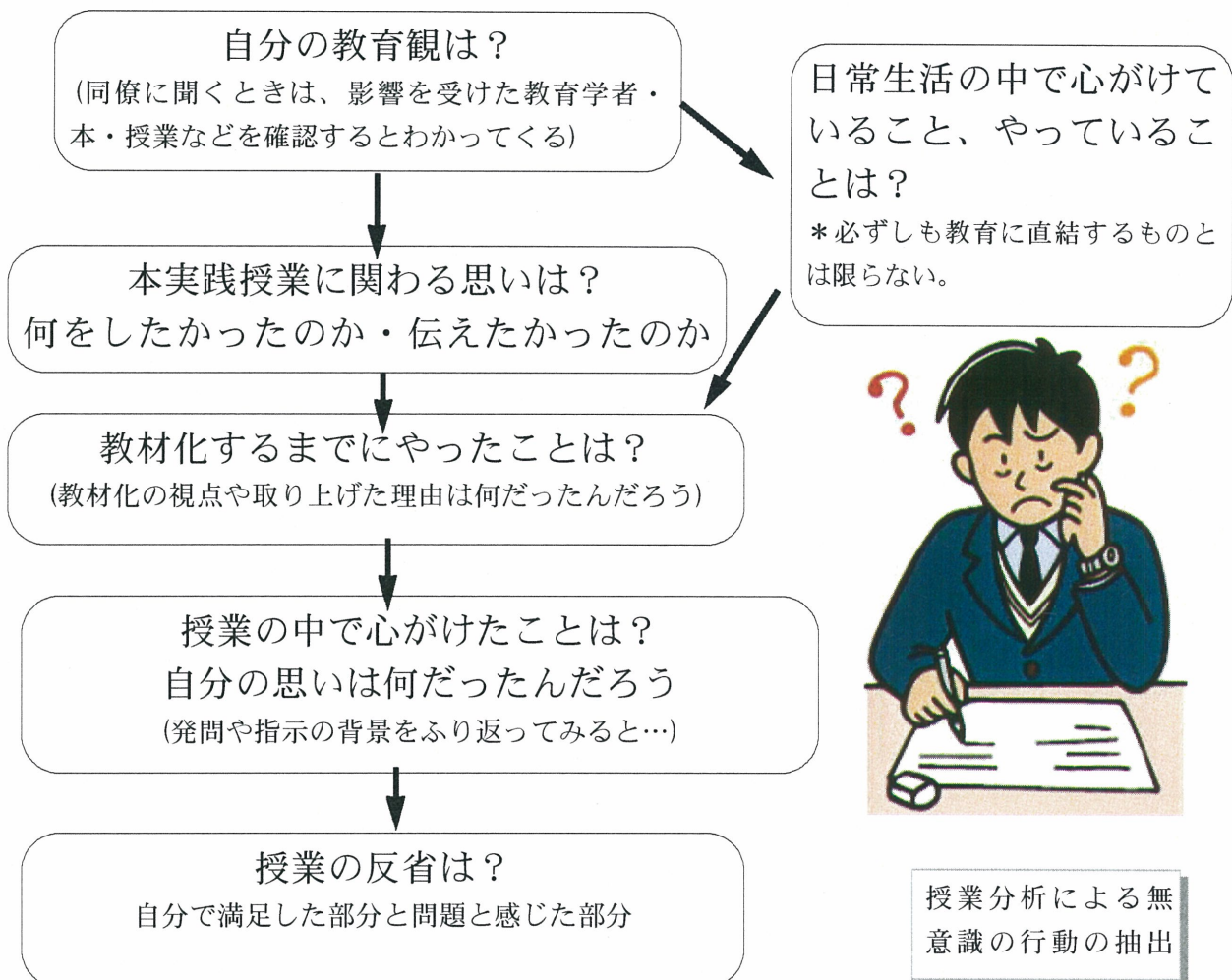


授業改善の鍵は、先生方の日常の授業実践に含む無意識の行動(教材研究・子ども理解・授業技術など)の良い点と問題点を、可視化もしくは意識化し、そこから次に何をすべきかを探し出すことです。

目には見えない教師の無意識の行動(意思決定)が、授業の運営や学級経営の中で大きなウェイトを占めていることは、暗黙知として運用されているために、通常教師は、それら無意識の行動を意識化することはほとんどないのが実態です。

そこで、まず下の図の流れに沿って、日々の実践をふり返ってみましょう。

授業研究の時も、この暗黙知を検討内容に加えることで、これまで見えてこなかった汎用的な方策が見えてくる可能性があります。



失敗から学んで、次の授業を創造する

失敗を生かして、未来の自分の仮想失敗事例をイメージすることがポイントです。

日々の教育実践の中では、思ったように展開できなかつたということの方が多いのが実際です。しかし、そのことには、次の授業につなげられる宝がたくさんあるといえます。失敗と考えて目を背けてしまうのではなく、振り返ることで宝を探し出してみましょう。

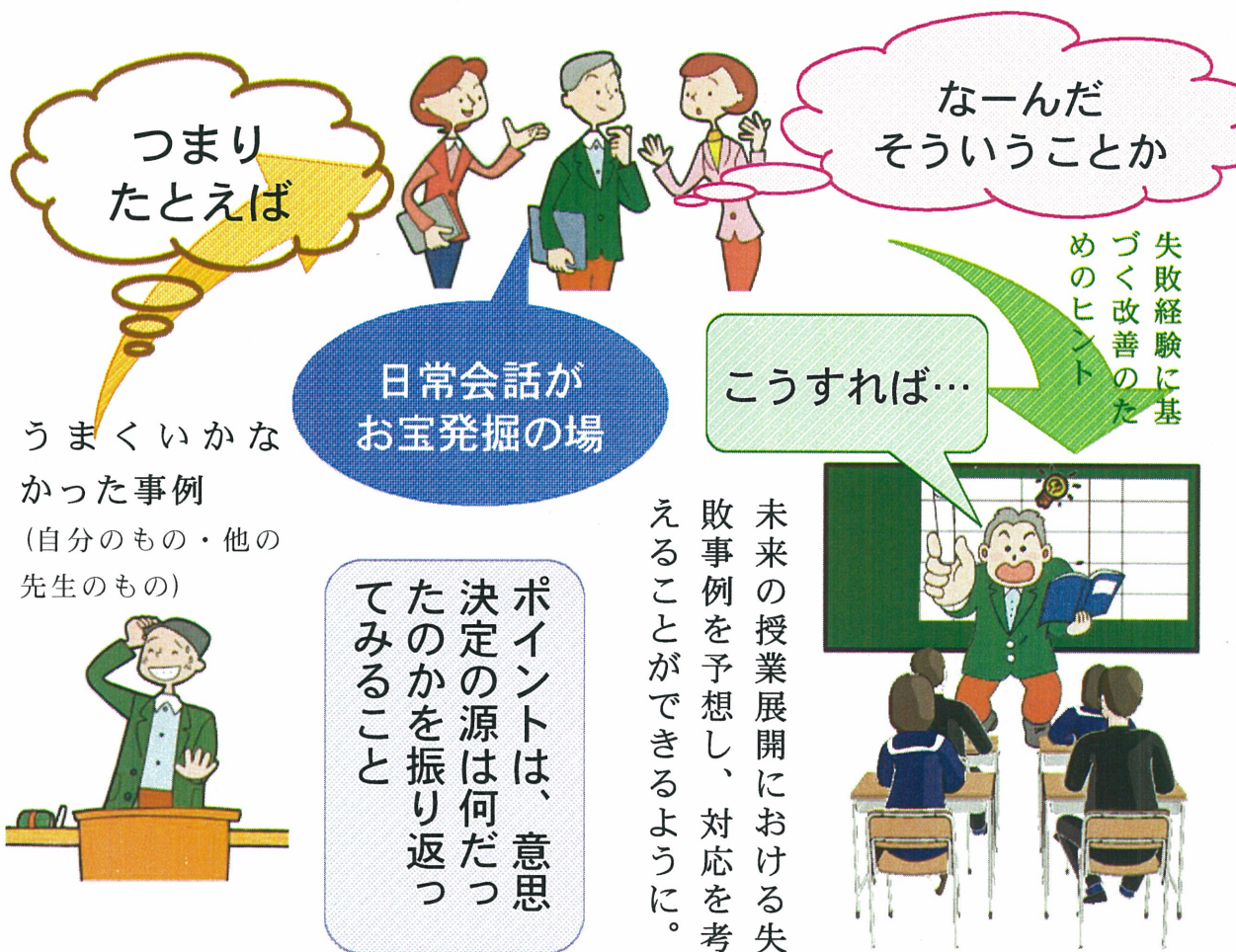
振り返るといっても自分一人では、宝を見つけることはできませんが、同僚性を生かして他の先生にも加わってもらおうと、意外な効果が発揮されるものです。

分析の視点は、うまくいかなかった（失敗の）原因を、客観化してみるということです。

授業者自身の場合は、発問や指示などについて、「なぜそのような意思決定をしたのか」という理由を、振り返ってみましょう。多くは、無意識のうちに判断しているのですが、後から客観的に意味づけをしてみると、何か傾向が見えてくるかもしれません。

同僚の先生は、「つまり〇〇が□□だったから……」とか、「たとえば、〇〇が□とか□だったから」と理由付けをしてみましょう。

そうすることで、「なーんだ、そういうことだったのか」と、未来を予測するためのデータとしての知識に転換することができ、「もし、……だとしたら、△△になる可能性が考えられるので、▽▽しよう」と、未来の失敗を仮想化して、新たな学習計画や指導内容や指導法を考えるきっかけ作りにつながっていくと考えられます。



教師の意思決定のメカニズムを自覚しよう

無意識のうちに行なっている教師の意思決定を意識化すると、自分の特徴が見えてくる



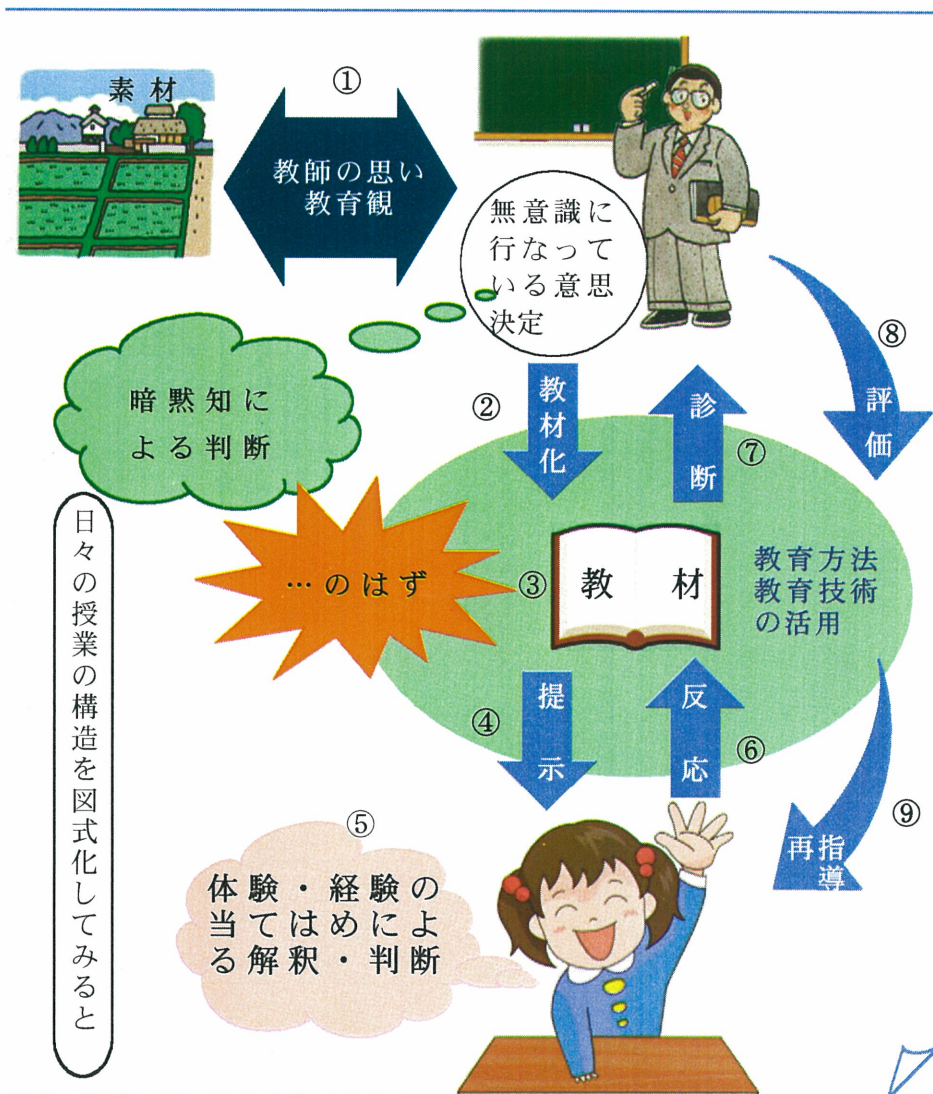
授業改善の基本は、教師の資質に対する向上心だといえます。

難しいことをするのではなく、日々の授業実践を自分自身でふり返ったり、同僚の先生方とふり返るといった基本的でかつ日常的な作業の積み重ねが、確実な授業改善につながります。

授業改善というと、何か校内研修として、特別な内容を組み込まなければならないと考えがちですが、日々の教室で行われている実践の中で、先生方が無意識のうちに行なっている行動(意思決定)を自覚するだけでも、改善のヒントはたくさん見つけられるはずです。

研究授業などでの授業研究も、可視化された現象のみを形式的に分析するだけでなく、授業の設計からの教師の意思決定について見直してみると、学ぶことの多いことに気づくでしょう。授業者にとっても、次の授業につながる何かが見えてくるはずで、授業改善として何をすれば良いかが明確になってきます。

教師の意思決定を振り返るといふ研修は、日常業務の中で行なうことができ、その結果として、授業実践の裏に潜む教師個々が無意識のうちに実施している教材研究の方法や、教育技術や指導法に関わるノウハウといったものを、無理なく多くの先生方が共有することができ、次の授業に生かすことができます。



図にも示しましたが、何気なく行なっている判断を、なぜあの場面で、あのような指示や発問をしたのだろうといった具合に振り返ってみましょう。

判断の基準には、「…のはず」といった先生方一人一人が固有に持っている暗黙知が多く、そのことが授業の中で、大きなウェイトを占めていることに気づくと思います。

【地域素材を題材とした授業を実践するための手引き】

「養蚕」と「殖産興業」を関連づけた学習における教材開発にあたって



地域に継承されている伝統的な文化を授業で扱いたいと思いますが、教材開発といっても、何をどのように教材化したらよいか…

特に私自身が、この学区に「どのような文化」が継承されているのか、わからないので困っています。



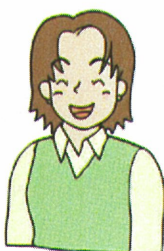
氏神さまに七夕飾りを飾っている子どもたちと敬老会の人たち

まずは、子どもたちにお祭りに参加したことがあるか、何か地域にかかわる言い伝えを聞いたことがあるかといったことを聞いてみましょう。

もう一つは、地域のお年寄りや、長くその地域に住んでいる方に、お話をお聞きすることです。

地域には「区長会」や「敬老会」など、地域をよく知る人たちの組織や集まりがあります。また、氏神様を守る「氏子」と呼ばれる集まりなどもあります。そうした方々に地域の伝統文化にかかわるお話をお聞きしてはどうでしょうか。

一番大切なことは、どの単元で、何を子どもたちに伝えたいかを、先生自身がしっかり持つことです。



子どもたちに、聞いてみたらいろいろなお祭りがあると答えてくれました。でも、「何のお祭り？」と聞いたら、答えられる子が一人もいませんでした。

伝統的な文化を教えるとむずかしく考えるより、子どもたちが知っているお祭りの「いわれ」や「思い」を、きちんと伝えて学習が、子どもたちには必要なんだなと感じました。

まずは、何を私自身が伝えたいのか決め出せれば、地域の方にも相談しやすくなるというわけですね。

また、知らないと困っているだけでなく、自分から学区の中を歩いてみることも必要なことなのですね。

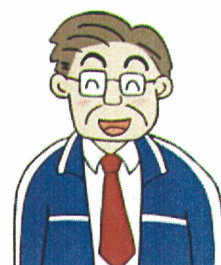


道端にある道祖神

よいことに、気がつきましたね。

ふだん、何気なく見過ごしているものに、気づくことも多いと思います。

先生自身が、目的意識を持って地域のことを勉強しだすと、地域の方々も「協力できること」がはっきりしてくるので応えやすくなり、学校の良きサポーターとして力になってくれるはずです。





この学習の小単元のタイトルは、「養蚕と殖産興業のつながり」となっていますが、私が勤務する学区には、蚕や養蚕にかかわる事例がありません。

どうしたらよいのでしょうか？

蚕や養蚕にかかわる内容を直接学習で扱える地域は、今ではごく一部の限られてしまうのも事実です。

しかし、視点を変えると、織物や漆器、陶器、木工など、その地域の特徴を生かし扱える素材は、たくさんあると思います。

食育の視点から、伝統的な郷土料理などを取り上げてみるのもよいでしょう。まったく同じ素材を扱わなくても、何か地域にかかわったものを窓口にして、自分たちが生活している地域の歴史や風土を学ぶ機会になるようにすることが大切です。



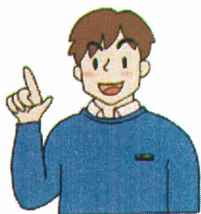
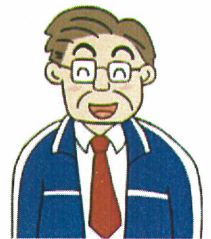
伝統文化という視点は、地域性が大きくクローズアップされるので、独自の教材開発が必要となり、教材研究にも時間がかかりますが、きっと、子どもたちは学習の過程で地域と深くかかわり、地域社会に参画する力をつけてくれると思います。ぜひ自分にしかない授業を創り上げてみて下さい。



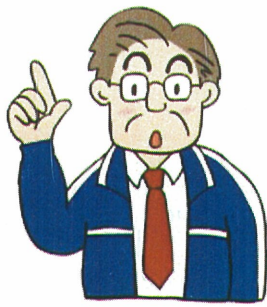
学んだ活動を広めて行きたいと考えるのですが、社会などの教科と総合的な学習とのつながりをどう持たせればよいのですか。

今回の学習指導要領の改訂では、「言語活動の充実」が求められ、学習活動としては「習得」「活用」「探究」がキーワードとなっています。さらに、社会科では社会を形成する力と進んで社会に参画する力の育成が求められています。

地域の文化について学んだ知識をまとめ、それら知識を活用して、自分たちの生活する地域のこれからのあり方を考えると同時に、どのようにかかわっていったらよいかを探究する学習活動へ発展させるには、総合的な学習との連携も必要となってきます。そうすれば、社会参画の力もおのずと育成されていくでしょう。



社会科で学んだことを、地域の人たちに知ってもらったり、伝統を受けつないでいこうと地域の行事などに自ら主体的にかかわったり、これからの地域のあり方を考えて地域の人たちに提案したりというように考えていけばよいのです。



そうですね。

たとえば今回の養蚕の場合、社会科で殖産興業を中心として扱います。

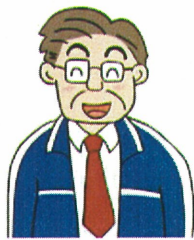
子どもたちが生活するこの地域でも、同じ時期に社会の動きに対応した人々の動きが起きていたことや、この地域が殖産興業の先進的な役割を担っていた史実を社会科の学習を通して子どもたちは知ります。

加えて、「虫歌のお観音さん」として、地域に今でも地域で受け継がれている養蚕にかかわる神社や、そこでのお祭りを再認識させることで、養蚕業を生活の支えとしながら、山間で生活していたこの地域の方々の思いに子どもたちが触れる場を設定します。

この学習を通して、子どもたち自身が地域の神社に興味を持ったり、お祭りに参加したり、地域に残る文化財を大切に守っていこうとする心が育っていくと思います。

さらに、自分たちの学習成果を新聞にして地域に知らせたり、地域パンフレットを作って、他地域の人たちにも知ってもらったりすると、活動の幅も広がりますよ。

蚕のように伝統文化を扱うと、学習の中で蚕の飼育をすることになったら、神社のまつりへ参加することになったら、宗教上の問題や虫が苦手な子がいるというように、実際的な心配が発生しますが…



確かに、現実には生活様式も昔とだいぶ違っているため、難しい面はありますね。

しかし、自分の地域にはこんな伝統文化があったんだ、こんな場所はこんないわれがあったんだ、さらには、それがこの地域の特色なんだと、子どもたち自身で知ることが、多様性を認めるという視点からの大切な学びでしょう。

また、何気なく生活している地域の歴史に触れることは、その土地への愛着を育むきっかけにもなりますね。

また、宗教上の理由から、活動に参加できなくなる子どもが出てしまう可能性もあるので、心配な面はあると思いますが、あくまでもお祭りに参加することは最終目標ではないことを明確にすることで、学習は成立すると思います。

学習のねらいは、地域の伝統や文化を知ることと、それを受け継いでいる人々の願いや思いに触れることを通して、目に見えにくい人々の思いや努力や苦心に気づかせ、自分たちもそれら伝統や文化の担い手になっていくという意識や自覚を養うことです。お祭りへの参加等の最終決定は、子どもたちにまかせさせたいものです。

教材研究をしようと思っても、歴史的な事実や、数値的なデータなどの資料が不足して、なかなか教材化することができません。

どのようにして、それら内容を調べればいいのか教えてください。





今はインターネット上で公開されている情報も多いので、ある程度の事項については、簡単に調べることができます。

しかし、注意してほしいことは、その情報の信ぴょう性です。だれが公開しているものなのかを、きちんと確認することが大切です。

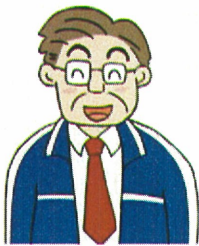
基本的な調査方法としては、県史、郡史（誌）、市町村史のような公的機関が編纂したものをまず調べてみましょう。

統計的な資料は、国や都道府県、市町村等の行政機関に問い合わせたり、図書館・博物館のレファレンスを利用することもひとつの手段です。

他には学校の記念誌（史）や地域の記念誌（史）などからも、その時々データを導き出すこともできます。

本などは探す手間がかかり大変かも知れませんが、慣れてくると案外楽しく教材研究が進められますし、そうした手間をかけている教材ほど教師の熱意も子どもたちに伝わり、深い学びになっていくと思います。

たとえば、養蚕を例にするとどんな活動が展開できるか教えてください。



養蚕に関する展開は、低学年の生活科から6年生ぐらいまでつながりを持った展開が期待できます。活動を項目的にあげますので社会科や総合的な学習とつなげてみて下さい。

- ① 桑グミを食べよう。桑グミをジャムにしよう（1・2年）
- ② 100年前の暮らし
（養蚕が盛んだった地域。今も残る蚕室や養蚕に関わる品々）（3年生）
- ③ 自分たちでも蚕を飼ってみよう。（3・4年生）
- ④ 地域の産業（昔と今の産業の違い）（5年）
- ⑤ 稲作（田鯉農法と養蚕のつながり）（5年）
- ⑥ 殖産興業と地域の産業のつながり（6年）

【副読本の作成例】

～松代の養蚕と殖産興業のつながり～



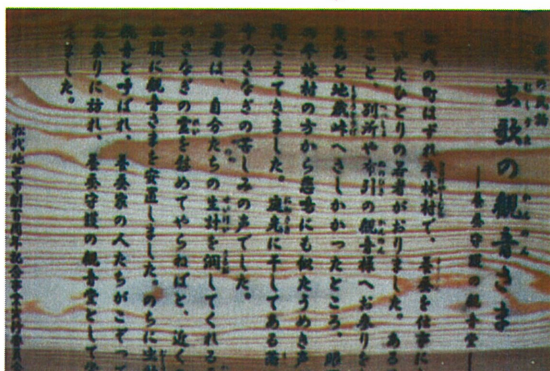
私たちの地域にはどんな神社やお祭りがあるのかしら。



ぼくの地区には、春と秋に近くの神社でお祭りをやっているよ。屋台も出るよ。



地域には昔から伝わるお祭り神社があるね。どんな歴史や人々の願いがあるか調べてみましょう。



虫歌観音



太郎山の社

松代地区には蚕をまつる「虫歌観音」という文化財があります。どんな歴史や地域の方の思いがあるのでしょうか。

この地区は、昔、養蚕が盛んだっらしいわ。

家には蚕を飼っていた場所や、蚕を育てる道具が残っているよ

そういえば、今も地域には「桑根井」など蚕と関係する名前が残っているね。

おばあちゃんも蚕の世話をしたそうよ。

何で松代は、養蚕が盛んだったのかな？調べてみようよ。



産業が盛んになるは、土地の様子や気候、原料の産出とそれを加工する場所や作られたものが消費されたり必要とされたりすることが大きな理由として考えられるね。そんなことをポイントにして学習を進めるといいね。

松代は蚕の餌となる桑がたくさんあったようだよ。

六工社という蚕の繭から生糸をとる工場が松代にあったらしいよ。

蚕が作るマユからとれる生糸はとていいお金になったので、蚕のことを「御蚕様」と呼んでとて大切にしていたらしいよ。

多くの家庭で蚕を飼っていたらしいよ。蚕を飼う部屋は別になっていて、近くの家でも飼っていた場所が今でも残っているよ。



六工社は誰がどんな目的でつくったのかな。

六工社の歴史やつくられた目的について調べてみましょう。



六工社跡の碑

富岡製糸場の様子を見本にしてつくられたらしいわよ。

富岡製糸場は官営工場として日本の経済発展に役立ったそうよ。

六工社は、1874年に松代の西条にできた製糸工場らしいよ。

松代に生まれた横田英という人が中心になっていたらしいよ。

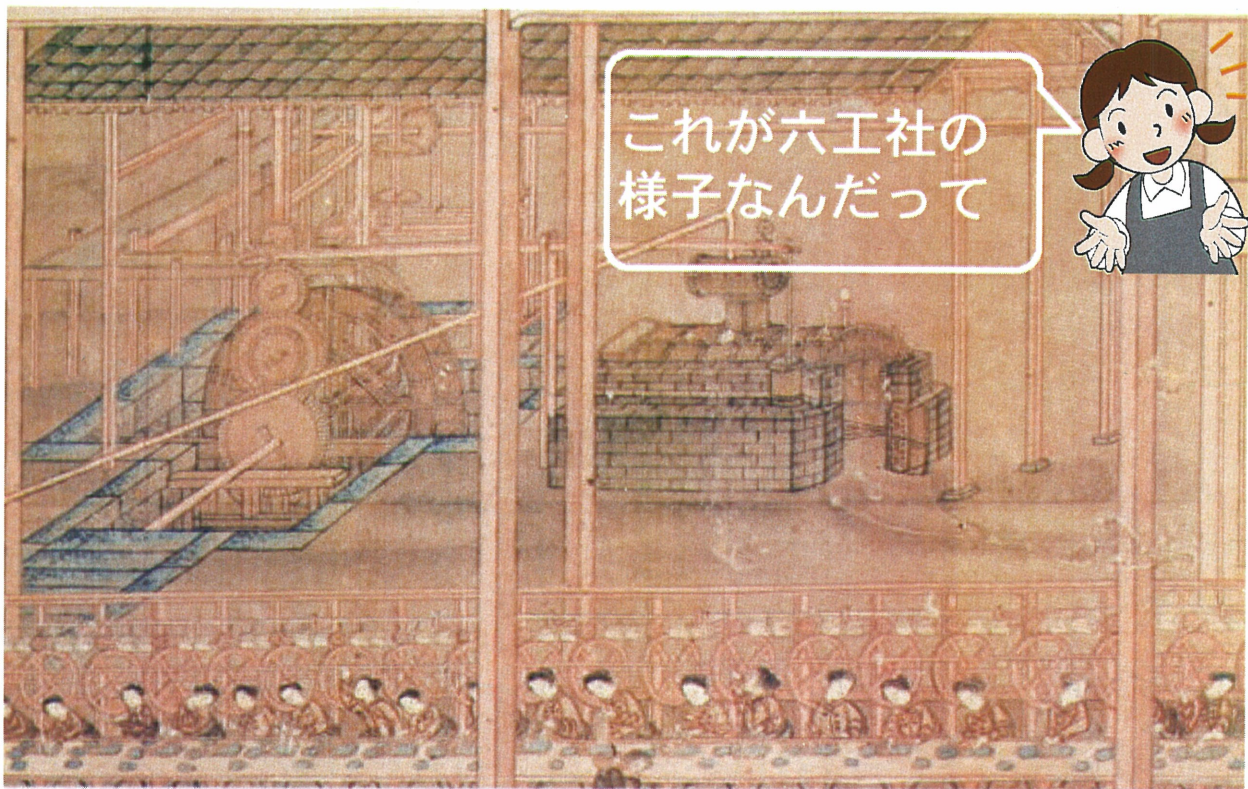




みんなが調べたように、富岡製糸場は官営工場として生糸の生産で日本の経済発展に役立ちました。六工社も富岡製糸場と同じように長野県内の生糸生産の発展に役に立ちました。

日本が世界と並ぶためには経済を発展させることが大切だったのです。その六工社は、大里忠一郎らが官営富岡製糸場にならい建設を進めました。和田英（旧姓横田）らが富岡製糸場から戻り、操業を開始しました。松代町西条の六工（ろっく）に位置した場所に設置された、国内初の民間蒸気製糸場なんだよ。

こんな場所が日本の先進的な役割を果たした時期もあったなんてすてきなことだと思いませんか？



これが六工社の様子なんだって

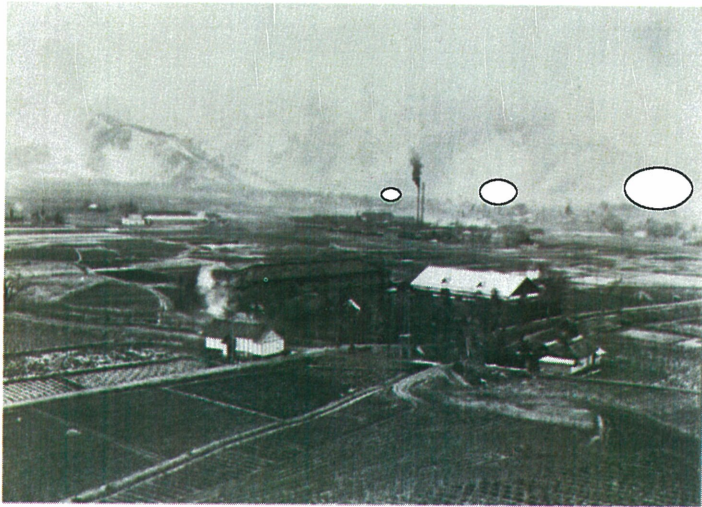


長野県歴史館蔵

これが六工社の商標か！
たくさん輸出されたんだろうな？

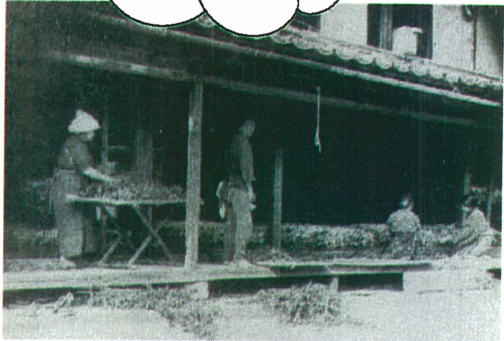


長野市立博物館蔵



長野市立東条小学校蔵

東条小学校の
近くにあった
窪田館製糸場
(昭和4年)



養蚕が盛んでない今でも、なぜ虫歌観音で祭りを行ったり、地域の人々が大切に建物を守ったりしているのだろう。

こんな風にして、蚕を飼っていたんだ！でも、今では見ることができないね。

養蚕がほとんど行われていないのに、どうして虫歌観音では今でもお祭りをやっているのかな。

養蚕のおかげで、この地域の人々はみんな豊かに生活ができたので、今でも大切にしているんじゃないかしら。



いまでも、こんなお札が皆神社から配られているらしいよ。だから、蚕の恩を忘れないようにするために、今でも大切にお祭りをやっているんじゃないかな。



地域の人々が今でもここで生活できるのは、蚕のおかげだということを忘れないために、多くの人々が関わって今でも祭りを続けているんだね。蚕を飼わなくなった今でも、蚕への恩を忘れずに、そして自然の恵に感謝することをこの地区の人は忘れずにやっているということだね。